ペルー紀行

メタデータ	言語: jpn 出版者: 駿台史学会 公開日: 2009-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 三郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/6047

ペルー紀行

小林三郎

(一)

昭和五五年度在外研究の機会を与えられ、日本を出発したのは、昭和五六年の早春だった。

成田からアンカレッジ経由でニューヨークに飛び、ボストン、ワシントン、フィラデルフィアなどで博物館・大学を訪問、目ざす中・南米の先史時代文化についての予備知識を得ることにした。

アメリカでは、留学中の本学卒業生、植木武君の滞在するロードアイランド州プロビデンス市を訪れ、彼の勉学するブラウン大学の人類学教室を訪問する機会も得て、中・南米に関する情報を得ることができた。又ボストンのハーバード大学付属のピーボディー博物館の見学もでき、ここでも中・南米の各文化についての予備知識を得た。

アメリカの東海岸を縦断して、ニューヨークから中米の大都市、メキシコ市に入ったのは、五月中旬だった。赤道に近いメキシコは、まだ寒かった北米の各都市とは違って、花と果物の匂いの充満する快適な気候だった。とはいっても海抜二〇〇〇メートル余りのメキシコ市では、身体の調子を整えるのに半日ばかりを要した。

アテスカ、マヤなどの文化を目にして、いささかおどろきの感があった。飛行機と車の旅で、かけ足でユカタン半島まで進み、カリブ海の色を眼の中に収めて、グアテマラに入ることにする。中米は、とにかく政情不安定だということで、かなり緊張しての出入国だった。大規模で、計画的なマヤの宗教都市のいくつかを巡検しているうちに、緊張や不安が次第に消滅していった。

(二)

アステカ、マヤ文化のすぐれた建造物、ピラミッド形の神殿遺跡などの巡検で、やや興奮気味のまま、グアテマラ――メキシコ経由でペルーに入ったのは、もう六月の下旬だった。ホンデュラス、エル・サルバドルはかなり政情不安定とのこと、メキシコでの情報ではとても不安な材料ばかりであった。

北半球から南半球への旅、勿論はじめての経験なので、一体どんなことになるのかと、アエロペルー機でリマへ飛んだ。夜が明けてまぶしい陽ざしが飛行機の窓から入り込んでくる頃、ウトウト睡りからさめた。窓の下をみると、綿みたいな白い雲がジュータンを敷きつめた様にひろがり、はるか東方に雪をかぶった六〇〇〇メートル級のアンデスの山々の頂上部分が銀色に光り輝いてみえた。六月下旬は、ペルーでは海岸部が雨季、山岳地帯が乾季なのだ。リマ空港は厚い雲の下にあった。

リマ空港は海岸の近くで、すぐ傍まで砂漠の迫っている荒涼とした所にある。国際空港なので、いろいろな人達が右往左往しているが、一歩空港ビルを出ると、そこはまさしくインディオの国だった。日本ではもうとっくにお払い箱になる様な車がたくさん走っている。ほとんどの車にフェンダーミラーがついていない。聞くところによると、つけてもすぐに盗られてしまうので、はじめからつけないとのことだった。よくみてみるとワイパーもついていない。雨がほとんど降らないから不必要なのかと思ったら、やはり盗られてしまうからだ、という話だった。おそろしく物騒な国に来たものだと、不馴れな者にとっては、身の縮む思いだった。もしかすると命まで盗られるのではないかと……。

リマ市の中心部、サン・マルチン広場に面して、日本人の経営する旅行社がある。日本を出る前に、東大のアンデス調査室にいる本学卒業生の丑野毅君から、ペルーの事情や、各地の遺跡についての情報をもらっていたので、遺跡の巡検についての現地の様子だけを、その旅行社からもらえばよかった。

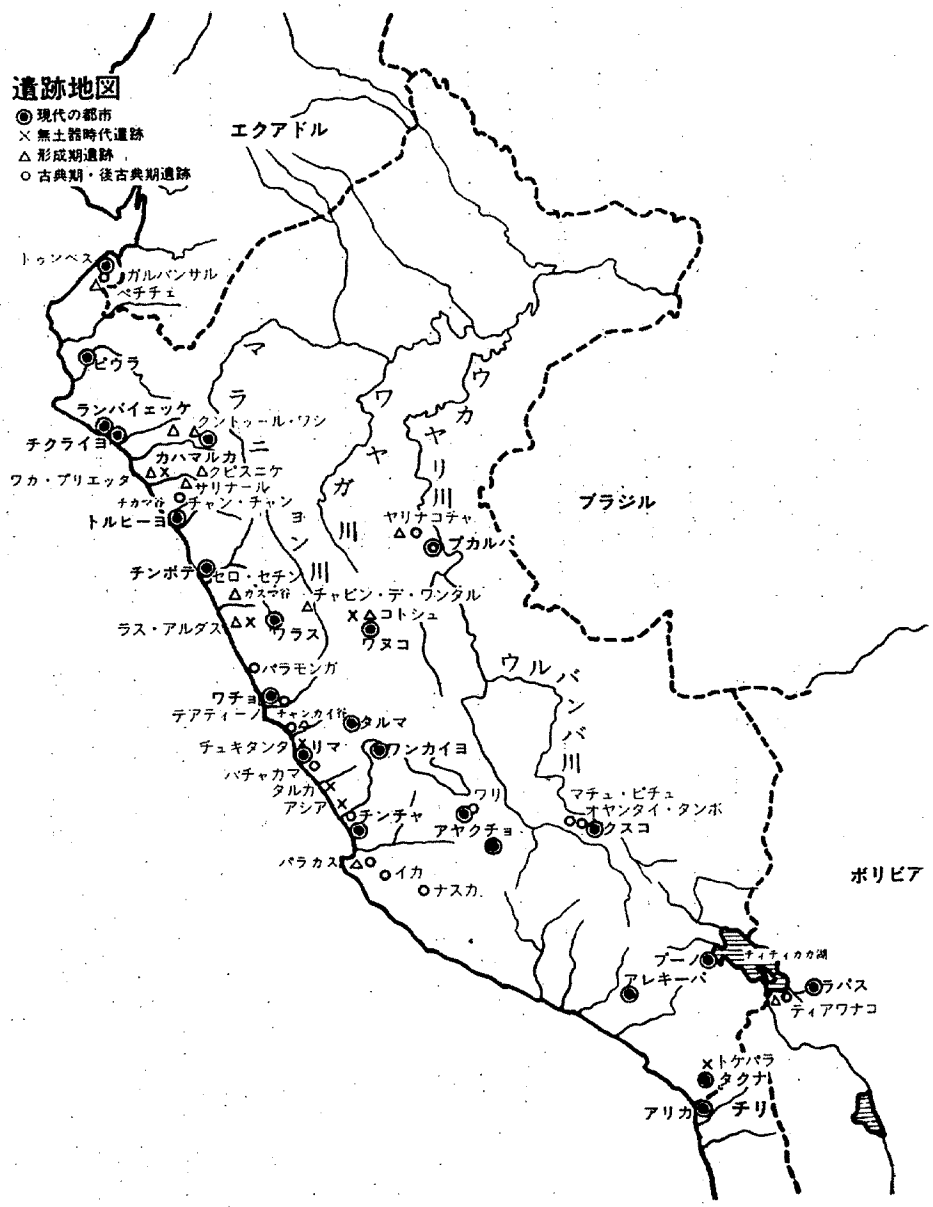
私が事務所を訪れて、各地の情報や交通事情などをたずねている時に、ペルーの日本語新聞、「ペルー新報」社長の飯田一夫氏と出会うことができ、ペルー北海岸地方のいろいろな様子をうかがうことができた。もともと今回の在外研究ではペルーにその大半を費やす計画ではなかったから、ペルーのアンデス地域の代表的な各時代の文化を巡検することにしていた。いくつかの参考書程度しか読んだこともないので、実際の遺跡や遺物を見ることで、いままでの不十分さを補うことは可能ではないかとも考えた。それだけの蓄積があるわけでもないから、むしろ中・南米の諸文化に対する入門であるという意識もあった。

新大陸における旧石器時代の研究は、ようやくその端緒が開かれた段階である。しかも学術的な調査のおこなわれた例もないとのことだった。チリとの国境近く、トケパラの洞窟絵画の発見で、狩猟民族の姿がはっきりとして来た。推定年代紀元前一〇〇〇〇年～八〇〇〇年位だというから、日本でいう先土器時代と時間的に平行するのかも知れない。

（三）

リマ市に連絡の本拠をおき、ペルーの北部から巡検の旅を開始することにした。何しろ鉄道が未発達であるし、目的地まではかなりの距離がある。目的地の近くまでは飛行機を利用し、そこからはタクシーを用いるしか方法はない。都市部ではレンタカーもあるが、はじめてで道不案内、おまけに高低のはげしいアンデス地域では、一人だけで車を動かすのは、全く危険というほかはない。

リマの町をあちこち歩き廻って、リマの地理が大体頭の中に入る頃、国立人類学考古学博物館、黄金博物館、天野博物館、ラファエル・ラルコ・エレラ博物館などを訪れてみた。これらの博物館は収集品がかなり大量で、各々一日だけでは見きれない内容をもっている。二～三日づつ通って見学する。黄金細工、土器、織物、織布など各時期のものを大分みることができた。



ペルーの遺跡地図（「古代アンデス文明展」目録より転載）

ペルーでの最初の遺跡訪問は、リマ空港近くのガラガイ遺跡であった。ガラガイ遺跡はやはり砂漠の中である。トウモロコシ栽培の定着、土器の形成期にいとなまれたこのガラガイ遺跡は、かなり規模の大きい、宗教的な面では早くも神殿をともなう都市遺跡でもあるという。日乾しレンガ（アドベ）を積み上げた遺跡は、今は中央部に遺跡の中心と思われる丘と、それを囲むようにして存在する建物群・墓地から成っている。彩色壁画のある神殿の一部は、いま調査中で、囲いの中にあった。遺跡をとり囲むように、原住民の部落があって、放し飼いの犬がたくさんいる。犬の群が寄って来てやたらに吠える。あまり気味のいいものではない。こわごわと丘の上に昇り、遺跡全体を見渡してみた。調査が進んでいないせいもあるが、あちこちにアドベの直線的な残骸がみえる。都市、耕地とその施設などがふくまれているのだろう。

三時間ばかりガラガイ遺跡を見学してから、リマの南方約三〇キロばかりのところにあるパチャ・カマック遺跡を訪れる。この遺跡も大規模なもので、いまは砂漠の中に眠っている。紀元七～八世紀頃が最盛期であったといわれ、神殿を中心とする宗教都市といわれる。最終的にはインカ帝国によって征服され、神殿が造りかえられた。太陽の神殿と呼ばれている大神殿は大平洋に面していとなまれている。月の神殿はインカ帝国時代の神官達の本拠地ともいわれ、これはきれいに復原されていて、土台部分はインカ独特の切石積の手法がのこる。

パチャ・カマック遺跡は、国営の遺跡博物館となっていて、入口近くに小さな博物館施設が設けられ、出土品の一部が展示されている。遺跡は現在でも発掘調査が進められていて、インカ及びそれ以前の各建物群が次第に明らかにされつつある。あちこちで土器片、布片、織物片、ミイラの頭蓋や頭髪などが墓地らしい所に散乱していて、たくさんの盗掘孔が目についた。

パチャ・カマック遺跡は、リマに近いこともあり、大きな遺跡なので、折をみてこの後、数回訪問することになるのだが、リマからこの遺跡までのパンアメリンハイウエイの眺めが非常に興味深いものであった。リマの市街地は別に変ったことはないが、市街地を抜ける辺りから、砂漠地帯にかかる地区の丘の中腹に小さな貧しい家が集中する。この風景はメキシコに滞在中にもみられたが、原住民が次第に市街地から周辺地帯に追い出されていることを意味しているのだそうだ。ペルーも、現在は工業化を推し進める方向を示していて、リマの南部には工場地帯も出現しはじめている。

（四）

チクラヨの北、約一〇キロにあるランバイケにブルーニング考古博物館があって、モチーカ期、チムー期の遺物がかなり保管展示されているというので、トルヒーヨの遺跡見学に先立って、ブルーニング博物館の見学をすることにした。

チクラヨはリマから飛行機で一時間余り北の海岸地帯にある。雨季でリマが曇天なのに、チクラヨまで行くと晴天であり、適当に乾燥していて快適である。

一九八一年七月一日にチクラヨを訪れ、七月二日にブルーニング考古博物館を訪ねた。三階建の白い建物に、別棟の黄金博物館が付設されている。展示品の大部分はモチーカ文化のもので土器、織物、布、黄金細工、ミイラなど、生活用具と埋葬に関する遺物がところせましと展示されていた。別棟の黄金室は墓の副葬品として発見された遺物がきちんと整理されて展示してあった。

チクラヨで一泊して、街を散策する。小さな街なので二〇分も歩くと砂漠に出てしまう位だ。街の中心部に寺院があって、その前が公園になっている。リマでは、ほとんど太陽を拝めないので、夕方になってから日光浴をした。夕暮れの空が美しい。

チクラヨからトルヒーヨまでは、乗り合いタクシー（コレクティボ）で行くことにする。パスポートを見せて乗車手続きをする。アメリカ製の乗用車で、インディオのご老人と一緒で、トルヒーヨまで約三時間の道のりだった。パンアメリカンハイウェイは、砂漠の中を走る。途中、いくつかの小さな部落を経由する。丘の麓のあちこちにアドベの建物跡がみえる。途中下車して見学したいが、同乗の人達に迷惑をかけることになるので、車窓から眺めて、写真を撮るだけにとどまる。

午後三時半ごろトルヒーヨに到着。チクラヨよりも一まわり大きい街のようだ。予約しておいた国営ホテルに入って一服。街の地図を手に入れて、まず土地感をうることにする。ホテルは街の中心部にあることも幸いして、どこへ出かけるにも便利だった。

チムーの都市、チャンチャン遺跡も、モチェの都、モチェ遺跡もこの街の郊外にある。いずれも歩いては行けない距離だし、バスの便もあるところではない。車の手配をしなければならないし、スペイン語のできない私にとっては、英語のできるガイドの必要もあった。アエロペルー、フォーセットの両航空会社の事務所を訪れて、車とガイドの事情をきいてみる。幸い、格安で二日間、ガイドもしてくれる運転手を紹介してくれた。彼は、英語がタドタドしいので、むしろ私には好都合だった。

チャンチャン遺跡は、神殿を中心とする宗教都市で、その規模はきわめて大きい。全部が調査されているわけではないから正確なことは不明だが、数キロメートル平方にひろがっているとも言われている。神殿の周辺は、発掘調査も進められているし、遺構の復原も多少おこなわれている。アドベで築かれている建物群には、透し彫りの幾何学文様、ペリカン、海獣、魚などのレリーフが特徴的だ。インカ帝国によって破壁され、スペイン軍によっても壊され、近年は雨による風化が著るしいという説明だった。

チャン・チャン遺跡

モチエ遺跡は、トルヒーヨの街の東南方、モチエ河の東側にある。月の神殿、太陽の神殿を中心とする古典期（西暦二〇〇～六〇〇年）の宗教都市で、モチーカ文化の中心でもあった。アンデスに源を発するモチエ河の河口近くに占地するチャンチャン遺跡とこのモチエ遺跡は、ともにトウモロコシ農耕を基盤とする文化を花開らかせたのだった。

月の神殿、太陽の神殿は、ともにアドベを積み上げて構築したピラミッド形の神殿で、その規模の大きさと、使用されたアドベの数量は気の遠くなるほどのものだ。いずれも大きく破壊されているのと、自然の風化によって、次第にむしばまれて来ている。二つの神殿の間の平坦地には、建築物の跡らしいアドベの遺構があちこちにのこされている。大半は砂漠の中に没しているが、彩色・彩文土器などの破片が散乱していて、盗掘や乱掘による破壊も進行していることを物語っている。

モチェ遺跡太陽の神殿のアドベ積み

ガイドが、とうもろこしからとった酒、チチャを飲んでみないかと、遺跡の近くの農家に交渉してくれた。アドベ造りの小さな農家の土間で、インディオの老婆の出してくれたチチャを味わった。まるでワインの味だった。上等な酒は文化の程度をあらわすともいわれる。彩色・彩文土器といい、チチャといい、モチーカ文化の水準を示すものかも知れないと思った。

トルヒーヨには、日本人の南米への最初の移民が、リマからまわされて開拓農民となった。カーサ・アライのご主人は二代目の人だが、両親とも日本人であったせいか日本語が達者な人で、両親は東北地方の出身だという。開拓時代の苦労話には迫力がある。いまはトルヒーヨで雑貨商を営んでいて、街で一番大きい店だ。トルヒーヨにもう一人、両親が日本人のハラダさんがいて、自動車部品卸店を経営している。アライさんが車で案内してくれた。お二人とも八十才近い方だが、元気そうでもうすっかりペルー人になり切った感じがした。

トルヒーヨからリマにもどり、次の計画を練る。次の計画は、海岸地帯からさらにアンデス山中の、初期神殿をもつチャビン文化の遺跡、チャビン・デ・ワンタルを訪問することである。チャビン遺跡は、標高四〇〇〇メートル級のアンデス山中にある。ワラスから一〇〇キロ位ある。リマからワラスまでは飛行機の便はないから、コレクティボを利用するしかない。

一九八一年七月八日の早朝、フランス人女性二人と共にコレクティボでリマを出発。朝六時の発車、ワラスまで六時間のドライブだ。リマから北一〇〇キロ位の所にあるバランカという街で朝食をとる。バランカを出発して二〇分位で、パラモンガ遺跡の標識がみえる。パラモンガ遺跡の標式を左手にみて、車は海岸線を走るパンアメリカンハイウェイから別れて、やや細目

の山岳道路に入る。有料道路で、ごく最近開通した道路だという。ワラスへ向う旧道と合流する辺りに料金所が設けられている。ここを抜けると道は上り一方で、しかもかなりの急傾斜である。いよいよアンデスにかかったのだ。山の斜面にへばりつくように、くねくねと曲った山道の連続で、峠を三つばかり越えると、眼前に高原がひろがる。北部アンデスの高峰が雪を被ってまぶしく光る。空は抜けるような青、草原地帯の緑と、色あいの組合わせは単純だが素朴でとても美しい。あちこちに小沼がある湿潤な地帯で、牛の群れと牧童の姿が何とものどかな風景を描き出している。景色にみとれているとき、突然、一頭の牛が車めがけて疾走してきた。車の前面と牛の腹部とが激突した。牛は数メートル飛ばされ、車は右にカーブをして止まった。同乗のフランス女性は悲鳴をあげて顔をおおった。牛は一回転して立ちあがり、牧草地の方へ何事もなかったように立ち去った。怪我をしたのは何と車だった。ラジエーターの一部がファンとからみあって、冷却装置がはたらかなくなった。運転手も苦虫をかみつぶしたような顔で、車の故障部分の点検をはじめた。こんな高地で、何時間も車が動かなくなり、夜を迎えたらどうしようか、と不安の色をかくせなかった。幸いラジエターの損傷もたいしたことはなく、孔のあいたまま、冷却水を補充しながらとにかくワラスの街へ着いたのは午後三時を過ぎた頃だった。ワラスも標高三〇〇〇メートル位の盆地で、周辺のアンデスが美しい。

ワラスに在住の日本人、タニカワさんを訪れることにした。ところが私がホテルに到着して、チェックインするとホテルのフロントは、親切にもタニカワさんに、すでに連絡をしてくれていた。タニカワさんのお迎えを受けてお宅にお邪魔する。ご飯と鱒の塩焼で夕食をご馳走になった。久しぶりに日本流の食事をさせてもらい、ワラス周辺の遺跡についての情報を提供してもらった。

チャビン・デ・ワンタルは、このワラスから約一〇〇キロ東側の、峠を越えた谷間にある。急峻なアンデスの斜面と、その谷間を抜けて車で約三時間余の行程だ。切りたった岩山と砂漠、どこからかコンドルが飛び出しそうな気配があるが、とうとうコンドルをみることができなかった。

ワラスからチャビンの部落までは、原住民の人々はバスを利用する。バスはときどき崖から転落して大事故をおこすらしい。私がチャビンに到着するまでに二ケ所でバス転落の事故跡をみた。斜面に車体がひっかかっていて、道路傍に十字架と花が供えられている。いかにもいたいたしい光景だった。

チャビン・デ・ワンタル遺跡は、ペルーでジャガー神の登場する最古の神殿をもつ宗教都市であるといわれ、西暦前九〇〇年頃の年代が推定されている。チャビン文化の標式遺跡で、標高三二〇〇メートルの山間部にいとなまれ、切り石を積みあげた神殿、板石、円柱へのレリーフ彫刻、神殿地下内部の通路や神官たちの部屋など、神殿建築として完成された姿をとどめている。レリーフによる神格化されたジャガーの表現は、アマゾン地域との関連や、さらにメキシコ・オルメカ文化におけるジ

ャガー神信仰との関連などの問題をふくんで興味深いものがある。チャビン文化の特徴である光沢のある黒色土器は、焼成の良好なこともふくめて、独特な土器であり、その技術的な面でも大変に謎めいている。

チャビン・デ・ワンタル遺跡の神殿の門

ワラスの中央広場に面して博物館がある。チャビン・デ・ワンタル遺跡の出土品があるのかと思っていたら、周辺各遺跡の出土品が断片的に収められているだけで、いささか期待はずれの感が強かった。ワラスからリマへの道は下り一方で、往路より大分時間的に余裕があった。夕方、ワラスを出発したコレクティボが、リマにもどったのは夜九時を少しまわった頃で、リマの街の灯がきれいに見える晴れた夜だった。

(五)

一九八一年七月一二日は、ペルーでは十年ぶりの国勢調査がおこなわれる日だった。ペルー人は勿論、外国人とその旅行者も全員移動が禁止される。調査官による調査が終了して、調査済のワッペンを貰うまでは外出すら禁止されてしまう。一日中、ペンションでおとなしくしているより仕方がない。

インカ帝国の本拠地、クスコへ行く予定が、この国勢調査とフォーセット社のストライキのおかげでだめになってしまった。やむなく予定を変更してボリビアに出かけることにした。ボリビアのビザはすでにとってある。

この頃、ボリビアは政変つづきで、私がリマ滞在中に一ケ月に何回もクーデターがおこっていた。しかし、クーデター騒ぎも長続きはせず、ほとんど大勢に影響はないらしいとのことだった。

一九八一年七月一四日、一二時四〇分発のボリビア航空で、ラ・パスを目指す。約二時間のフライトでラ・パス空港へ。途中、アンデス山脈を空中から観察でき、チチカカ湖も上空から眺めることができた。リマとラ・パスでは一時間の時差があり、おまけに標高差は四〇〇〇メートルある。環境の急激な変化で多くの人々は高山病にかかるといわれる。幸か不幸か、私はその症状を経験しなかった。

ラ・パス空港での入国手続きの完了の時、直ちに出国の予定日と、その手続きを申告するようにといわれた。やはり国内の状況が不安定であるためとも思われた。

ラ・パスの町はすり鉢の底みたいな所で、周囲が四〇〇〇メートル級の山々にかこまれている。空港はすり鉢の縁辺にある。町の中心部でも標高三五〇〇メートルある。町の中央部にシマ・ツアーという日本人の経営する旅行社がある。ラ・パス周辺の遺跡見学についての情報をもらい、ボリビア最大の遺跡といわれるティアナワコ遺跡を目指す計画をたてる。ボリビア

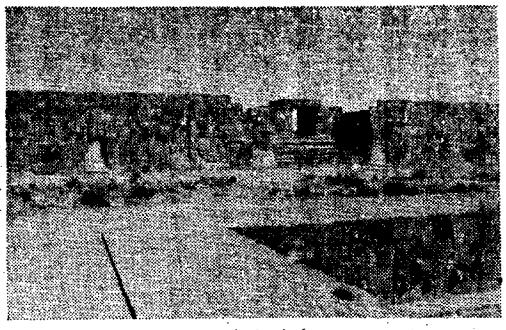
でのもう一つのハイライトはチチカカ湖を船で巡航することだった。

チチカカ湖見学は、幸いにもう一人の観光客がいて、一緒に車に乗ってくれれば金額が半分になるとのことで、ふところの淋しい私はこの話にのることにした。町を出て空港のわきを抜けて、広漠たる草原地帯・砂漠地帯を通ってチチカカ湖畔へ、約四時間ほどの行程だった。途中ラ・パスの旧市街のあったところを抜け、田園地帯の小学校での祭りの様子を偶然みたりして、インディオの世界の一部を眺めることもできた。チチカカ湖は世界で最高所にある湖で、しかも塩水湖だ。獲れる魚も豊富で、昼食においしい魚のフライとビールでご気嫌だった。葦船の作り方の話を聞き、織物を織る作業もみた。リャマとアルパカの群れ、米作りの田んぼなど、異国だなあという感じと、何か東洋的な雰囲気とを味わった。

ボリビア音楽、フォルクローレにも多少興味のあった私は、ケーナの音やサンポーニャの音を本場で味わいたかった。夜になると音楽バーでの演奏を聞きに出かける。文字にも書きのこせない、カセットテープにも録音不可能な音楽、乾燥地帯の枯れた音は、いつまでも心の中にのこせるだろう。

ティアワナコ遺跡は、チチカカ湖の東南方二〇〇キロばかりのところ、グアキという町から東へ二〇キロのところにある。いまは砂漠の中にひっそりとしているが、かっては泉を中心とした大規模な都市遺跡であったといわれる。インカ帝国の基礎ともなったといわれるティアワナコ文化は、高度な石造建築の技術を持ち、その初期の文化はすでに神殿を中心とする宗教都市を形成していたといわれている。神殿中央部の広場には、ペルーのチャビン文化と共通する獣首を壁面にはめこんだ壁面構造をもっている。太陽の門と名付けられた石造の門には、戦士の像などが彫刻されていて、一枚石からつくられた門の見事さとあいまって、彼等の技術の素晴らしさを示している。

ティアワナコ文化は、今のペルー領海岸地域からナスカ、ボリビア付近にまで分布していた海岸ティアワナコ文化と、チチカカ湖、ボリビア地域の古典ティアワナコ文化とに分類されていて、南米アンデス地方のモチーカ文化、ナスカ文化と並んで古典期地方文化の開花期にもあたっている。このティアワナコ文化の石造技術は、中央アンデスのワリ文化を経由してさらに成長しインカ帝国の技術として完成されたともいわれている。

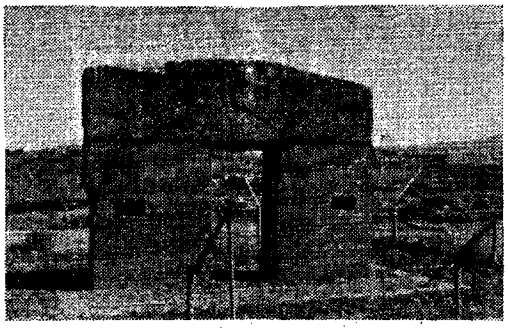


ティアワナコ遺跡(ボリビア)

ティアワナコ遺跡に、累々として散在する石造物の断片は、それぞれが完成品ではないが、各所に人工が加えられていて鋭い加工痕が往時を偲ばせるどころか、現代の細工によるものではないかと錯覚さえする。この遺跡も、ボリビア政府による発掘調査が細細とながら進められている。

ラ・パス大学の人類学科の人々によって発掘されているらしいが、遺跡に人影はみえなかった。不安定な政情がここにも反映していたのかも知れない。

ティアワナコの神殿に林立していたであろう石像の大部分は、ラ・パス・スタジアムの前の野外博物館に展示されている。その他に町の中心部にティアワナコ博物館があって出土品の展示がある。館の改築中で博物館の見学が出来なかったのは、本当に残念だった。すり鉢の底からみえる七〇〇〇メートル級のイリマニ山が、山頂に雪をかぶって美しい。



太陽の門

(六)

ボリビアから一度ペルー・リマに戻って、体の調子を整えて、次は中央アンデスの遺跡をたずねる予定をたてたが、クスコへは飛行機の都合でなかなか予定がたたない。

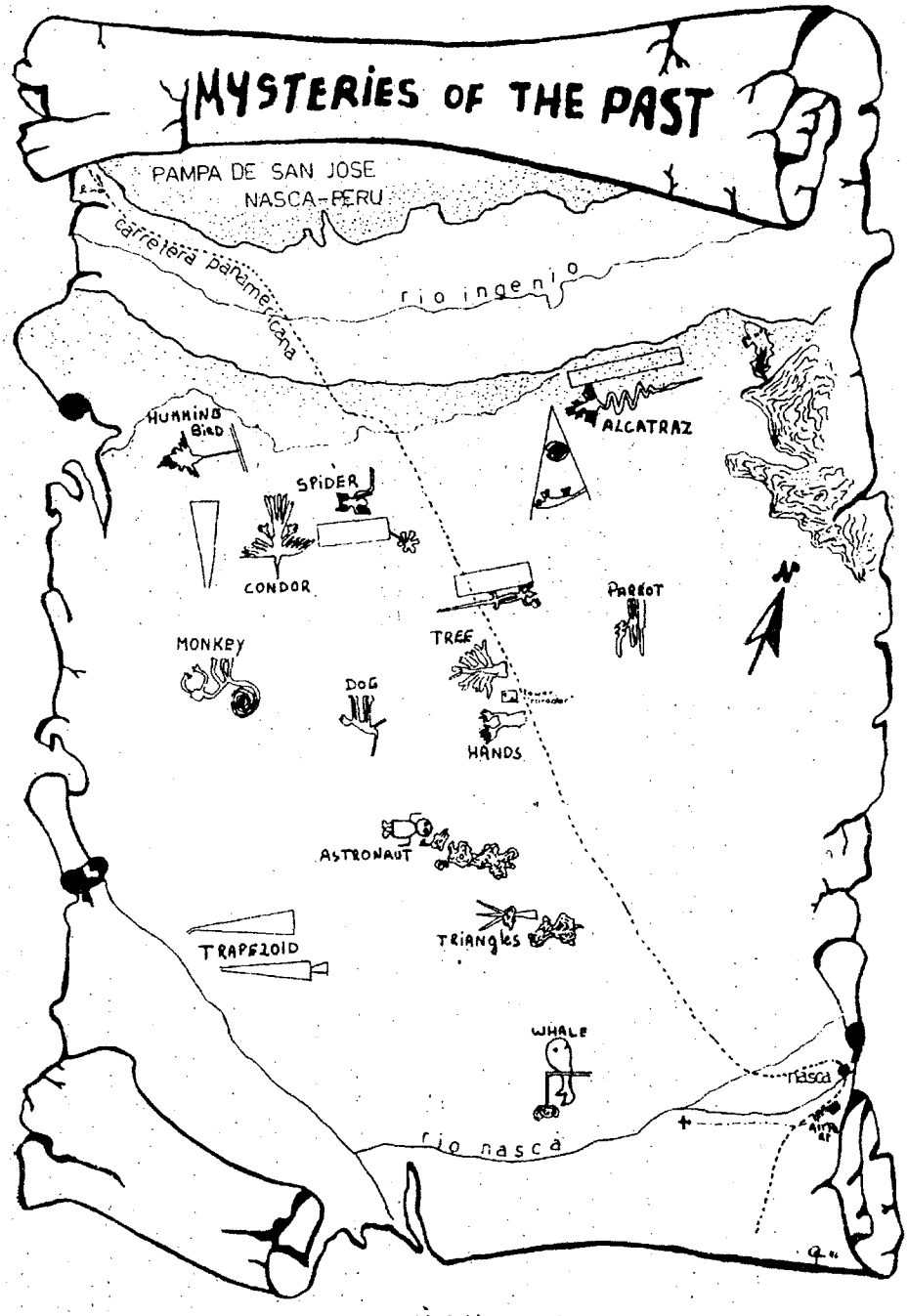
地上絵で有名なナスカ行きが実現したのは一九八一年七月二十六日だった。ペルー空港からパイパー双発機で約一時間三〇分でナスカ空港へ到着する。連綿と続くアンデス高地と砂漠をみて、やがてナスカ平原上空へ。いく筋もの川のあとが、アンデスから海へ向っている。ナスカは全くの乾燥地帯、年間を通じて風もなく雨も降らないという。砂漠の地上絵が消滅しないのもそんな自然条件が幸いしていたのだった。

ナスカ空港の滑走路は砂利敷きで、はなはだおそろしかった。ここで単発のセスナ機に乗りかえて地上絵観察に出かける。コンドル・クモ・犬・木・猿・鯨などの絵が赤茶けた砂漠の中にみえる。いろいろな想像と憶測とがとびかって、ナスカの地上絵はさらにミステリアスになって来ているらしい。ナスカ文化は、ティアワナコ文化と並んで古典期の地方文化として開花し、彩文土器と美しい織物とが特徴的である。地上絵は山岳地帯のものと海のものとが表現されているので、ナスカ文化の幅の広さをうかがい知ることができるし、その地上絵は西暦二〇〇〜六〇〇年ごろに描かれたと推定されている。

ナスカにもナスカ博物館があって、周辺各地出土のナスカ期の土器、織物、墓からの出土品がケースせましと陳列されている。この博物館は、いつも陳列品が盗難にあっていて次第に収蔵品が減少しているという話だった。何とも嘆かわしい限りである。ナスカ地上絵も次第に消滅の危機にあるとのこと。最近は車がやたらに乗り入れて来て、車の轍が地上絵を部分的に消してしまっているらしい。地上絵は、それほど深く掘り込まれている訳ではないから、今から保存対策を講ずる必要があるだろう。

(七)

リマの北方四〇〇キロにあるチンボテ市の郊外に、セロ・セ


MYSTERIES OF THE PAST
PAMPA DE SAN JOSE
NASCA-PERU
carretera panamericana
rio ingenio
HUMMING BIRD
ALCATRAZ
SPIDER
CONDOR
PARROT
TREE
MONKEY
DOG
HANDS
ASTRONAUT
TRIANGLES
TRAPEZOID
WHALE
nasca
rio nasca

ナスカ地上絵の配置図

チン遺跡がある。遺跡整備中で見学できないとのことだったので半ば諦らめていたが、見学可能という情報をえたので、クスコ行きに先立ってセロ・セチン見学に出かけることとする。飛行機の便がないので、止むをえず車を利用することになる。

一九八一年七月二五日、早朝リマを出発。車も二人の運転手が乗り込んでいて、用意周到というところだ。パンアメリカンハイウェイを一路、チンボテに向かう。バランカにて昼食、夕方カマス町に着く。セロ・セチンにはカスマ町の方が都合が良いが、あいにく宿泊の場がとれなかった。漁港であるチンボテの方が町が大きい。海岸通りを抜けてチンボテへ出る。

セロ・セチン遺跡はカスマ町の近くで、カスマ谷の北側の山間にある。まわりの岩石は老岩石がゴロゴロしていて、今にも崩れて来そうな所である。遺跡は山ふところに抱かれるようにしてあった。神殿遺跡である。チャビン文化期のもので、立石に戦士像などのレリーフが描かれているが、チャビン期特有のジャガーのレリーフがみられない。今のところチャビン期の遺跡で海岸近くにあって石造建築はこのセロ・セチン遺跡だけだということだ。他は、アドベによる建築物ということで、セロ・セチン遺跡の重要性がうかがえる。神殿は山裾と密着して建てられているので、遺跡の大半は土砂に埋もれているようだった。中央神殿をとりかこんで、いくつもの建物群があったのだろうが、いまはみられない。石造りの部分と、アドベ塊がみられ、アドベ塊には彩色の痕跡がある。かっては美事な彩色神殿であったことが想像される。中央神殿の外壁は板状石を立てならべ、神官や戦士らしいレリーフが表現されている。それらの顔は、ほとんど正面を向かず横向に表わされているのが印象的だった。神殿入口正面部分には立った神官らしきものと、儀仗のようにみえるレリーフが描かれている。この部分だけはレリーフの調子が違う。チムー期のものが後につけ加えられたのかも知れない。

セロ・セチン遺跡のレリーフ

チンボテに二泊して、二日目の早朝にチンボテを出発、リマへもどる途中バランカ町の地方にあるパラモンガ遺跡を見学する。パラモンガ遺跡は、海岸に近く海路、陸路とも交通の要所らしい。アドベで造られた城砦という感じで、チムー期に運営されてインカになっても利用されたらしい。最高所に太陽、月の神殿があって、市松模様の黄白赤の彩色がのこっている。この部分はインカ時代の建造によるといわれる。下から城砦に登る道は迷路のように曲りくねっている。日本の中世の城とも構造的に似ているのではないかとも思った。天守閣のかわりに神殿が鎮座しているという違いはあるが……。

(八)

七月二九日は、ペルーの独立記念日だ。いろいろな催しものがあるが、最大のイベントは軍隊パレードだ。七月二七日頃からもう祭り気分で、市中はうかれた人達で賑やかで、各家々、ビル入口や窓からペルー国旗がかかげられていて、日本の風景とは大分違う。

前日の二八日は、ほとんどの商店は休業になってしまう。タバコや日用品などは早目に買っておかないといけない。ペンションでおとなしくしているより方法がなくなった。

二九日の独立記念日は、早朝から外は静かであった。本番の日は、みんな朝寝坊をしているにちがいない。午前一〇時からパレードがはじまり、テレビで中継している。約三時間ほどの長いパレードだ。戦車も飛行機も総動員という感じのパレードだが、何か緊張感に欠けたものだった。

夕方、同宿の池宮さんと一緒に、ペンションのすぐ近所にある、日本で言えば焼き鳥屋、縄のれんという感じの店へ出かけ、ビールを飲みながら、アンティクチョ・コラソンを頬ばった。これは牛の心臓を炭火で焼き、ペルー独得のヤクミをつけて食べる。ちょうど「もつ焼」というもので、なつかしい味がする。日本人の口にあうペルー料理だ。新鮮な牛の心臓でないと美味しくないとのことで、どこの店にもおいてあるというものではない。いうなればアンティクチョの専門店でのみ美味しいものが食べられるということだろう。

(九)

八月のペルーは涼しくて、冬なのに寒いという気がしない。日本はさぞかしむし暑いだろうなあ、と想像しながら動きやすい毎日をすごした。

天野博物館には、時間のある時はいつもお邪魔して、編物・布・土器などの展示品以外のものを拝見した。チャンカイ谷の資料や、天野芳太郎氏作製のチャンカイ谷遺跡分布図、編年表などを検討させていただいた。チャンカイ谷へはジープなどがないと一人で出かけても、皆目遺跡の見当はつかないということで、車や一緒に行ってくれる人を探さなければならなかった。チャンカイ期の文化は、インカ直前の文化として、ペルー中部の海岸地域に開花した文化で、灰白色、薄手の土器に彩文をほどこし、墓の副葬品の中には人面付土器・動物・魚などを形象った土器などがある。織物、あみ物なども独特の発展を示している。天野氏の蒐集品には、チャンカイ文化期の遺物が豊富で、量の多さと質の高さでは、まさに世界的なコレクションである。

天野コレクションの中には、かなりの出土地不明資料もある。その中に、日本の縄文式土器にきわめてよく似た土器片もふくまれていて、かってエクアドルに縄文式土器があるという新聞報道を思い出したりした。もし似たものが出土していても、年代的にみると、日本の縄文式土器とは、かなりの距りのあることは明白である。

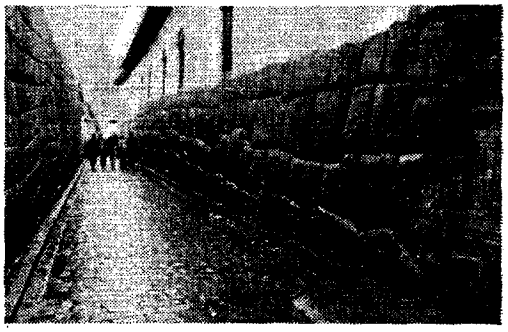
(10)

待望のクスコ行きが実現したのは、一九八一年八月三日だった。九時四〇分リマ空港発、一一時クスコ空港着。ドラド・インというホテルを予約しておいた。クスコでは少しぜいたくをしようと、中級のホテルを選んだ。クスコは標高三五〇〇メートル、周囲を山にかこまれた盆地に発達した町で、まさしくインカの首都であった。

ホテルでチェックインをすませると、部屋へ案内してくれる前に、ロビーでコカ茶をすすめられた。コカは高山病の特効薬であるとか。日本では麻薬扱いをされているから、どんなものかは全く知らなかった。コカを一服していると、一天にわかにかきくもり、突風が吹き、二十分ほどの集中豪雨があった。アンデスの自然のおそろしさを味わった。雨のあとの空は、すみきったブルーであった。

クスコの町は、インカ時代の町並みがあちこちにのこされている。見事な切石の技術とその構築法は、まさしく驚嘆に値する。世界一大きいといわれるカソリック教会が、プラサ・デ・アルマスに面して偉容を誇っている。土台はインカ時代のもの、上屋はスペイン時代のものだが、土台は全くゆるぎもみせない石積み、上屋はあちこちでアンバランス状態をみせている。インカ建築の勝利が現代になって証明されている光景だ。

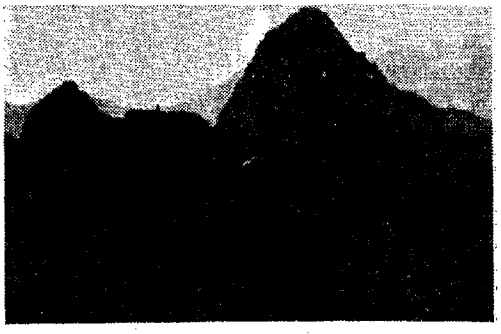
クスコには有名な考古学博物館がある。インカ時代の土器、石器、墓からのミイラなどが豊富に収蔵されている筈だ。クスコ到着の日に、町を歩いて考古学博物館を訪れたが、何と不幸なことにストライキだった。しかもいつ解除になるかわからないということだった。以来、クスコ滞在中、考古博物館の前を通るのが日課となってしまった。



クスコのインカ時代の町並み

クスコからピサクへ向かう街道沿いに、インカ時代の遺跡がいくつかある。要塞・城砦・宗教センターなどそれぞれ性格のことなった遺跡群である。アンデス山中に源を発するウルバンバ川は、クスコの北方三〇キロばかりの町、ピサクの町を抜けて狭い谷間を流れる。街道はクスコからピサクを通ってウルバンバ川沿いに走り、マチュ・ピチュに至る。これとは別に山岳地帯に開発されたインカ道が走っている。山岳地帯のインカ道は、山の急斜面にへばりつくように幅二メートルにも満たない石畳の道である。近年、ようやくその一部分の地図が出来上った。クスコからマチュ・ピチュに至るこの道沿いには、あちこちに砦が設けられているらしい。出来れば歩いてマチュ・ピチュまで行きたかった。重装備が必要だろう。

一九八一年八月五日、六日の二日がかりでマチュ・ピチュ見学に出かける。朝五時半起床、七時クスコ駅発の汽車でマチュ・ピチュへ。約五時間の汽車の旅は、標高三五〇〇メートルから八



マチュ・ピチュ遺跡

〇〇メートル位まで下る。山岳砂漠地帯から温帯、亜熱帯地区へと環境変化が垂直的に分布するペルーの特徴が、植物の変化や景色の変化とともに肌で感ぜられる。マチュ・ピチュ駅から遺跡まで、バスで約二〇分位の行程、急斜面をジグザグに登りつめたところに遺跡がある。バスの終点から二、三分歩いて遺跡の入口を入ると、眼前に一気にパノラマが開ける。神秘の山ワイナ・ピチュがそびえ、せまい尾根の上に群がる建築物が廃墟となっている。インカ独特の石積みが累々と続いて、両側斜面の段々畑とともに城砦都市の趣を呈していた。一九一一年、エール大学のハイラム・ビンガム教授の発見によって、一躍有名になったが、発見当時は密林であったという。ビンガム教授は火を放って遺跡の調査をしたと伝えられている。材木と草によって葺かれていた建物の屋根などは、もし遺存していたとしても、この時に灰尽に帰したのではないかと、誠に残念に思われてならない。スペインの進略によって西暦一五三〇年ごろに崩壊したと考えられている。

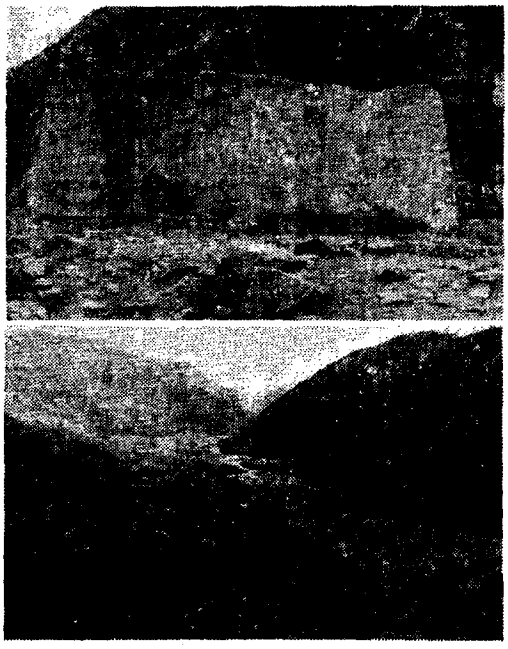
皇帝、王妃の館、兵士の館、監獄、処刑場などと、段々畑に通ずる水路、水道、日時計など、眼下を流れるウルバンバ川とともにこの城砦都市が自給自足が十分に可能な構造をもっているとも言われている。

ビンガム教授の調査によっても、ほとんど出土遺物がなかったといわれ、マチュ・ピチュ遺跡が城砦都市としてどの位の期間、いとなまれていたのかが不明である。

(二)

マチュ・ピチュの東、ウルバンバ川の二〇キロほどの所にオヤンタイ・タンボという遺跡がある。やはりインカ時代のもので、巨石を立てた岩屏風が有名で、やはり城砦であったのではないかといわれる。スペイン軍の波状攻撃によっても、とうとう陥落しなかった守備堅固な城砦だったらしい。石積み二階建ての建物があることでも有名である。ウルバンバ川沿いの道と、山岳地帯を通る今の鉄道とは、このオヤンタイ・タンボで合流する。しかし、オヤンタイ・タンボからマチュ・ピチュまでは、道路はあるが車が入れるほどの幅員はない。ウルバンバ川に沿うインカ道が遺存しているのだが、谷間がせまく未開発である。

クスコに一度もどってから、私は今度は車を使ってオヤンタイ・タンボと、途中のピサク遺跡と探索することにした。わざわざ車を使ったのは、途中、ウルバンバ川流域での農耕地やその条件などを見学したかったからだ。トウモロコシ栽培の状態や、現代の農村の姿は、おそらくインカ時代のものを想像するのには有効だと判断していた。川に沿ったせまい平坦地を利用

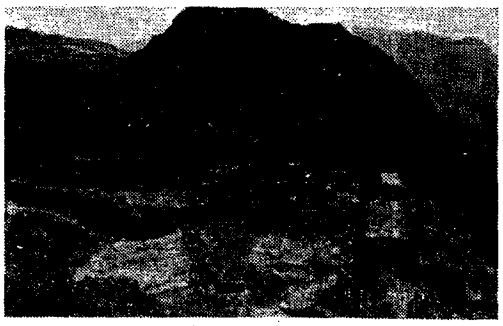


(上)オヤンタイ・タンボ遺跡の岩屏風
(下)遺跡からみたウルバンバ川と畑作地

した水田では米を作り、山あいの緩傾斜面を用いてのトウモロコシ作りは、もうこれ以上開発しえないギリギリまで土地を利用している。ところどころに遺る小規模な見張台的な遺構は、山腹の崖上にみえる。この耕作地は、オヤンタイ・タンボ、マチュ・ピチュを支える生産の場なのだろう。

途中の昼食に、トウモロコシを焼いたパンと、クイと呼ばれるモルモット様の小動物の焼肉を食べた。これに野菜サラダとコーヒーがあれば十分な食事となる。家畜はほとんどが牛と豚で、リャマやアルパカはほとんど見られなかった。

ピサクの町は、クスコの北方三〇キロばかりの一つ山を越えたウルバンバ川の流域にある。川の両側にひらける、いくらか広い平野、といっても小盆地が川によって連接されているような地形で、町はいくつかの盆地の東側のはずれ、ウルバンバ川の上流に近い所にある。背後に三〇〇〇メートルほどの山岳地帯を控え、前面（南側）にひらける小平野をもつピサクの町は、インカ時代以来の町で、いまでも日曜市がたち、近郷近在の人々の参集する中心地でもある。



ピサク遺跡の中心部

町の北側山地の中、ウルバンバ川に向って突出する舌状尾根の上にピサク遺跡がある。遺跡自体は城砦的な性格が強いものだろう。最高所に神殿と水道の取水口が設けられ、傾斜面の段々畑をとりまくように積石による建物群が並ぶ。おそらく戦士たちの館、農民の家屋などがふくまれているのだろう。この遺跡に入るための道は三ケ所ある。一つは、川から急斜面を一直線にのぼる道、隣接する砦とこの本拠地を結ぶ山の斜面に設けられた道と、山の尾根を通って砦と本拠地を結ぶ道とである。三本の道はいずれも二メートル未満の幅しかない。道の両側はきちんと斜面の下から切石を積み上げて垂直に近い崖を形成する。交通と砦の守備とを兼ねた見事な装備だった。全長二・五キロほどの尾根に断続的に遺跡がみられる。遺跡の半分ほどは整備されていて、いまも部分的に発掘調査と保存工事が

進められている。

ピサクからクスコに至る途中、クスコに入る直前の峠の付近にタンボ・マチャイ、プカプカラ、ケンコー、サクサイワマンなどがある。タンボ・マチャイは水浴場ということで、インカの皇帝の浴場といわれ、今でも豊富な水が流れている。プカプカラは砦だろう。ここに立つと、クスコからインカ主要道がすべて見渡すことができる。ケンコーは巨石を利用した宗教センターのようで、サクサイワマンは、クスコを守る北側の大城砦遺跡だ。巨石をふんだんに用いた石垣が幾段にも積み重ねられ、最高所に神殿らしき構造物などが付設されている。インカの石造技術の代表的な遺跡ということができよう。

（三）

インカ直前の文化にワリ文化期がある。ペルーでは最初の帝国だったといわれるワリは、ペルー側のチチカカ湖周辺からナスカ、アヤクチョ、クスコ周辺にまで及んでいたともいわれる。石積による高い石垣をめぐらせた都市を形成するのが特徴的である。ワリ期の切石の技術や石積の技術の中に、後のインカの技術に通ずるものがあることから、インカの源流となったものではないかという説もある。ボリビアのテイアワナコ文化との関連性もあって、標高三五〇〇メートル前後の位置に存在することが、また不思議にインカと共通する。いずれにしても山岳民族、ケチュア族、アイマラ族の形成した技術、文化であろう。

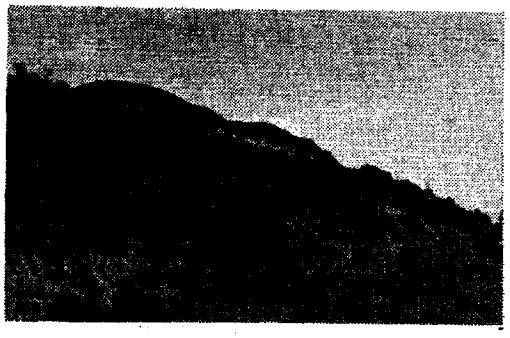
クスコから、チチカカ湖のほとりの町プーノに通ずる道沿いに、ピキリァクタ遺跡がある。この遺跡は、石積の高い石垣をもつワリ文化の特色を示すもので、三キロ四方ほどの広さの所に石垣をめぐらせ、その中も縦横に走る石垣がみられ、都市遺跡ではないかと推定される。遺跡内の最も高い丘の上に石造建築の基礎部分が遺されており、中心的な神殿跡ではないかと思われる。クスコに最も近いワリ期の遺跡で、ワリとインカの関係を知る手懸りとなる重要な遺跡といえよう。

（三）

ワリ文化に興味をもち出したので、どうしてもアヤクチョのワリ遺跡を見学したくなった。アヤクチョは学園都市である。大学訪問にも期待して、八月一五日にリマを発った。標高三三〇〇メートルほどの高地にある盆地で、チチカカ湖、クスコ、ナスカ方面との連絡道がアヤクチョを要点として通じている。

ワリ遺跡は、アヤクチョの町の西北方約三〇キロほどの山岳地帯にある。例によって車を手配して見学する。数キロ四方に及ぶ大遺跡で、山の頂部平坦面をとりかこんで石垣がめぐり、内部に神殿などの建物群、墓群などがいくつかのブロックにわかれて遺存している。大遺跡であるが、数ケ所で発掘調査が進められている。墓群の一部は屋根を架けて保存処置も進められ、見学者の便もはかっている。神殿と思われる切石による遺構が一部で群集している。この技術の中にインカに通ずるものがふくまれているように思える。土器片も若干表面採集してみた。採集できるものはほとんどがインカ期のものらしい。ワリ

期の土器を採集しようと、大分周辺を模索してみたが、予習が不充分だったのでその目的を達することができなかった。とにかく大きい遺跡なので、一日や二日では見きれない。二日間、弁当持ちで出かけることになった。人の姿の見えない遺跡の中を、一人で見て歩いていると、少しホームシックになる。人の影をみられるのは、遺跡入口の守衛所だけだった。晴天に恵まれて、まっ黒に日焼けした。



ワリ遺跡遠景

八月一九日の夜、ホテルの部屋の電話が鳴った。受話器をとり上げると「モシモシ」と日本語が聞こえて来た。まだ若い、神戸市の岡本さんという女性だった。彼女も一人旅らしく、なつかしさもあってか私を訪ねて来てくれたらしい。小さな町で、日本人の姿などほとんどみられないアヤクチョの町では、ホテル泊りの日本人の存在は、彼女にもすぐわかったらしい。英語、スペイン語の達者な彼女に大いに助けられたり、勇気づけられたりもした。

私がアヤクチョにいる間に、ダイナマイトによる小規模ながらテロ事件が大学でおきた。大学は捜査のために封鎖されて、人類学教室も、出土品の陳列も見学できなかった。しかし、アヤクチョの国立考古学博物館があって、ワリなどから出土したものが展示してある。小さいながら新らしい建物で、アメリカ的な展示がなされていて、大いに参考になった。

アヤクチョの南、一二〇キロの所にビルカス・ウァマンというインカ時代の遺跡があるときいて、その遺跡の見学を計画したのは、岡本女史と別れた翌日だった。スイス人夫妻と食堂で逢って、両方とも片言英語で意気投合しての衝動的な計画だった。ホテルの紹介で車を手配し、翌朝六時に出発した。標高四二四〇メートルのトクト峠で日がのぼる。この地点でクスコ行きの道と分岐する。マヨパンパ川がアンデスをえぐるように流れ、小河川がこれに注ぎ込む。四〇〇〇メートル級の高地にある平原、湿地、牧場、農地など、のんびりとした風景の中に、五〇〇〇メートル級の山が屏風のように並び、それを背景として乗馬姿のインディオが牛を追う。そんな中を、日本製のトヨタコロナは走る。小さな川は橋がない。水の中を車が走る。乾季だから出来ることで、雨季だと道もなくなるということだ。車一台がやっと通れる山腹の道を六時間走って、ビルカス・ウァマン遺跡へ着く。相当疲れる。遺跡は大半が崩壊していて、原形をとどめるところが少ない。田舎町全体が遺跡で、教会も警察もインカ時代の建物の一部を直して使っている。少さな町だが、ちゃんと中央にプラザがある。インカ時代の町づくりが、かなり高度な計画性をもち、同時に西欧的ですらあったらしいことに、あらためて驚いた。

帰りにビスチョンゴ部落を通りかかると、そこにもインカ時

代の遺跡があると聞いて、道草することにした。ビスチョンゴは標高三一四〇メートルの所、マヨパンパ川を渡る橋のある部落だ。部落からは歩いて約一時間、急な山をあえぎながら登ると、眼前に突如として沼がひらける。沼の岸辺に牛・馬・豚などの家畜、農家が数軒、ひっそりとたち並んでいる。カメラのシャッターを押すことも忘れて、スイス人夫妻と三人でしばしため息の一時だった。小規模な神殿をもつインカの砦らしい。インティ・ワタナ遺跡という。大半は崩壊していて、スペインの破壊が、アンデス山中の隅々まで行きわたっていることに驚ろく。

アヤクチョに戻ったのは、夜の一〇時ごろだった。三人とも全く疲れていた。若い運転手も疲れただろう。ホテルのロビーでビールをご馳走して労をねぎらった。

（四）

久しぶりにリマに戻る。ペンションに戻ると、現在は広島大学の教授をしておられる佐藤信行先生と同宿であることがわかり大喜びをした。佐藤先生は故泉靖一先生の門下で、ペルーの民族、言語学が専門だ。ケチュア語を話せる日本人ではまず第一人者だろう。スペイン語も勿論だ。ケチュアの部落に入って彼等と生活を共にした経験も豊富で、いろいろな話をうかがう機会を得た。三〜四年おきにかっての泉門下生がペルーに集合して、各分野の研究をさらに進める作業をしておられるとのこと。数人の仲間の先生方もペルーに来ておられ、各地に散って研究を続け、八月下旬にリマに集合する予定とのことだった。九月にはジープでアンデス山中を走破する予定とのことで、日本からジープを海路送って、もうリマに着いている頃だという。国際免許を持って行ったので、皆さんがリマに集合するまでの間の一週間ほどは、ジープが空いている。早速ジープを受取りに行き、トヨタの整備工場で点検整備をしてもらう。偶然にも大いに機動力をうることになった。

パチャカマック遺跡への再度の巡検、アンコン、チャンカイ谷への挑戦、ピスコ、パラカス、タンボ・コロラドなどのプレインカ期の各遺跡への巡検など、このジープのお陰で能率的に進行することが出来た。勿論、佐藤先生らも一緒で、ほかにペルー在住のハナコ・サトウさんも同行する。ジープの旅が合計四日間、リマ周辺の遺跡は佐藤先生と二人で、遠出の観光を兼ねる時は同乗者も増えた。たのしい、勉強になるジープの旅だった。

カニエテにある日本寺・慈恩寺は、ペルーへ移民された方々の菩提寺である。最初期の移民の方々の苦労は大変なことだったらしい。ブラジル移民より先行すること一年。いま、リマには移民資料館が竣工して、一九八一年七月にオープンした。ブラジル・サンパウロには、すでに移民資料館がオープンしている。

（五）

リマも九月の声をきくと、空に明るさが増してくる。いよい

よ初夏の季節という。日本では四季があるが、ペルーでは二季のようだ。町には半袖姿もみられるようになった。いよいよ予定通りアルゼンチンに向う準備をはじめよう。

リマでの最後の一週間は、本や地図をなるべくたくさん購入することにあてる。国立考古学博物館、美術館の再見学、リマの観光めぐりもしよう、と盛りだくさんの予定をたてる。佐藤先生の示唆を得て、書店めぐり、陸軍省の地理部へも行き、ペルーの地図などを購入した。ペルーでの滞在の総決算も、お陰様で、何となくアカデミックな雰囲気の中ですることができた。

スペイン語の本をかなりたくさん買いこんだ。比較的安かったので、船便で日本へ送ることとし、帰国したらスペイン語を勉強しようと決心してみた。ケチュア語の辞書も手に入れた。これを勉強するのにはまずスペイン語が先決問題だ。

しかし、この決心はいまだに実行されずにいつも胸の奥にこびりついている。アルゼンチンでは本場のタンゴが聞きたい。広大なパンパ、牛の群れ、西欧的なブエノスアイレスの町なみ、などなど、少し図々しくなっている中で、少なからず観光的気分となっているのに気付いて、再び初心を再確認のことだった。

一九八一年九月八日、リマ空港からアエロペルーでブエノスアイレスへ。途中、チリのサンチャゴに寄港、緑の多い景色を満喫した。

在外研究はこのあと、アルゼンチン、ブラジルを経由して、第三の目的地イギリスに向うことになる。ロンドンでは晩秋、北欧では初冬と、寒い在外研究の連続だった。

この間、研究室の先生方はもとより、文学部の諸先生、学生諸君に大変ご迷惑をおかけしてしまった。

ペルー滞在中は、同僚の方やリマ在住の日本人、日系人の方々にいろいろとご援助、ご教示をいただいた。お名前を記しえないが末筆ながら深い感謝の意を表したいと思う。さらに、昨秋、逝去された天野芳太郎先生のご冥福を心よりお祈り申上げる。

また、にわか勉強の上でのペルー巡検なので、記述の中に誤りがないとは言えない。ご叱正いただければ幸いに思う。

（この小文は、昭和五七年度、駿台史学会大会での特別講演「ペルーの遺跡」の要旨のつもりで書いたが、なお関連する諸遺跡についても若干追加していることを付記する。）